
巨大病院

子鉄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巨大病院

【Nコード】

N7860B

【作者名】

子鉄

【あらすじ】

ある春の日訪れた病院から全ては始まった。一人の男の壮大な人生を描きました。

（前書き）

訂正しました。お読みくださいませ。

長い冬が終わり、桜の蕾が開くのを待たずして春を十二分に感じさせる日だった。

暖かい木漏れ日が街を包み、小鳥達は自由に大空を舞っている。

そんな暖かい日、私は静かに日記を開き当時の事を思い出していた。

あの日、体調を崩した私は病院にやってきた。
近所の山下病院だ。

名医と優れた看護師が常駐する誰もが認める素晴らしい病院である。

あの日あのようなことになるうとは、そして今私がこのような人間になるうとは、誰も想像していなかったであろう。

いや、想像など出来るはずもない。

想像などできたらつまらない人生であろう。

人間とは本当に不思議な生きものである。

何の気なしに訪れた病院がその後の私の全てを劇的に変えたのであった。

「すみません」

「はい、どうされましたか？」

あの日、病に苦しむ私は近所の病院に来ていた。
そこでは優しい白衣の天使が笑顔で出迎えてくれた。

「あつ、はい。昨日の夜から風邪をひいてしまったというのがありまして、下手をすると肺炎や心臓病を併発しているかもしれないのです。それは本当です」

「では、お呼びいたしますのであちらでお待ち頂けますか？」

「あつ、はい。あとオシッコがあれですので、膀胱炎を併発しているかもしれないのです。それはあります、はい」

「あちら右手にお手洗がありますので。次の方どうぞつ」

「あれ？いや、次の方ではなくてですね、私はそんなに軽く扱ってもらっちゃ困る病気かもしれないですよ。あなたみたいなメス猫に何が分かるんですかっ！」

私は看護婦の冷淡な態度に少々ムツとした。

当時の私は江戸っ子らしく気が短く、喧嘩は三度の飯より大好きで、目が合った次の瞬間には胸ぐらを掴む程であった。

クールではつちりねつちより熱い、びんびんに光るジャックナイフとでも言うべきであろうか。

「ええ、恐らくあなたにも専門的な事はお分りにならないと思いますので、先生に診て頂くのがいいと思いますけど？」

その看護婦は事も無げに、目も合わさずに言った。

恐らく私の事をだんご虫か何かと思っていたのだろう。

「えっ？じゃあなんですか？私には私自身の事が分からないとおっしゃるのですか？えっ？じゃあ私はまず頭の病院に行かなければなりませんね」

「いえ、そういう事では……」

「あれですか？私はもう先が長くないと、そうおっしゃるのですか？」

「はあ、ちよつと、よく分かりませんがお呼びいたしますのでこちらでお待ち下さい」

「あー分かりましたよっ！何番目なのっ？」

「えー、十五番目ですね」

「はあっ？じゅっ、十五番っ！何で私が先の短いじーさんばーさんより後なのっ！」

私の荒らくれる様に、先程までうるさかった野良犬も静まりかえっていた。

しよせんは犬である。

「ここは病院です。そういった発言は謹んで下さい。あと、順番はお守りください」

「はあっ？順番でなんですかっ？人間に順番なんて付けられないん

ですよ。あなたが一番、私が二番。そんなものではありません。みんなが平等なんです。私はそういったゆとり教育で育ってきたのです。ここまでは理解できますか？日本語で申しましょうか？」

「いえ、ちよつと分かりませんが？あなたが一番、私が二番と言いますか、あなたは十五番目ですので」

「そつ、そういう事を言ってるんじゃないですよ。私が今言ってるのは、人間は平等と言うことをですね。言葉刈りです。分かります？私はいま言葉刈りをしてるんですよ。そもそも平等というものは教育基本法の概念に基づいてですね……………」

「早くから待たれている方が先になるのは平等なことですよね？」

お座り頂けますか？」

私を諭すように看護婦さんは言われた。

「融通の利かないいやらしいメス猫め」

次第に私の苛立ちは頂点に達しようとしていた。

「あー、じゃあ言いましょうか？私はねえこの後大日百貨店で催されているプラモデルの歴史博物館に行くんですよ。話題の零戦MAX777がお目見えする日なんですよ。分かりますか？」

「いえ、分かりませんが」

「あー分らないでしょうよ。MAX777は水上三等兵がパプアニューギニアの乱の時に敵地にぶっこんでいった幻の零戦なんですよ。分かります？ま、ぼ、ろ、し。魔母露死です」

「いや、プラモデルですよね？」

「プッ、プラモデルかどうかはあなたには分からないでしょうっ！」

「先程そうおっしゃいましたよね？」

「なっ、なんですかあなたはっ！言葉刈りをしようと言つのですか！私はゆとり教育で育ってきてるんですよっ！」

熱い闘志で議論を投げ掛ける論客だった私は、さながら危険を顧みない勇敢な水上三等兵のようなもので、周囲の総てを圧倒した。腰の曲がったお年寄り達もぴんっと背筋を伸ばし、涙を流しながら数珠を握っていた。

「とにかくっ！専門的な事は私と先生のトップ会談で決めますのであなたは今夜の合コンの心配でもしといたらいいじゃないのっ！」

「専門的な事ではなくて今は順番の話をしてるんですけどね。はい、田中さーん3番にお入りください」

「ちよっ、ちよっと！私も待ってるんですよっ」

「ええ、あなたは今から十四番目にお呼びいたしますので」

「じゅっ、十四番で、私も私の膀胱も、もう我慢できない状態なんですよ。私はお手洗いに行つてきますので、それまでに決めてくださいね。あと、合コンがあればしたらお付き合いしましょうか？へっ、一度は汚れたその体でしょうよっ！」

そう吐き捨てると私は色んな意味でガラガラした下半身を押さえながらその場を去った。

私のそんな様に周りのお年寄り達はひっそりと息を潜め、手を合わせて拝みながら事が平穩に終わるのを待っているようだった。

「ふーっ。危なかった」

私が受け付けへ戻ると何やら騒がしい様子だった。

「おいつ、ネーちゃん。俺あ時間がねーからよ、早く診てくれっちゅーてんだわっ！ああっ？」

「いつ、いえ、順番ですの」

見るからに危険な大柄の男が先程の看護婦に詰め寄っている。

こういう輩を野放しにする市政に対して無性に腹が立った。

いつしか、無意識のうちに私は自らの拳を握り締めた。

始めて人を殺める時というのはいつだって突然なのかもしれない。

「言ってることがわからねーのかっ？あんっ？時間がねーんだよ、

時間がよ」

「他にもそういう方がいらっしやいますので」

「あっ？どいつだよ。俺が直で話してやるわっ」

「ああ、あちらの方です。あちらの野球帽を被って、鼻水たらして
いる汚らしい人」

看護婦が指を指した先には私一人。

その後ろには蠅が一匹止まっているだけだった。

「えっ？」

辺りを見回すとロビーには人っ子一人いなくなっていた。

「おい、兄ちゃんっ！」

「はい・・・・・・・・はいっ!!」

私は人に好印象を与えられる最高の返事をした。

こんな返事をしたのは小学校の卒業式で卒業証書授与の際に名前を
呼ばれた時以来であった。

「おい兄ちゃん次待ってんのか？」

男は人を殺さんばかりの鋭い眼差しで私に問ってくる。

完全にほんまもんだ。

「いえ、わっ、私は新聞勧誘の者でして、こちらの病院とは一切関係ございません。私もこの病院の建設には反対だったんです」

私が完全に裏返った声で答えると、看護婦の表情が有り得ないほど険しくなった。

「先程はお待ちでしたよね？もうお気分はいいんですか？」

「えっ？えー？何を言ってくれちゃってるのかなこの人は。メス豚ですよこの人。はい、鹿児島産のメス豚です」

「はっ？あんなに急いでしたよね？順番がきましたけど」

「なっ、何を言っておられるのかちょっと分かりませんが、ここはそっち系の病院ですか？気分が悪いです。病院だけに。では私はこれで失礼致します」

私は帽子を取り男に深々と一礼すると、看護婦をぎっ！と睨みそそくさとその場を去った。

・・・その日の午後、私は再び山下病院にやってきた。

サングラスとマスクをし、初めて訪れるふりをするにすると、そこには先程と同じ人が受け付けをしていた。

「あの、すみません。私、頭と喉が痛いっていうのがありまして、あと、膀胱がちょっとあれです。それは本当です、はい」

私は自然な動作を心がけ、怪しまれないように言った。

「新聞でしたら結構ですけど？」

何もかもお見通しのようには看護師が返す。

「あつ、いえ、先程は間違えてしまいまして、もう一度だけチャンスを下さい」

私はサングラスとマスクをとりながら深々と頭を下げた。

「チャンスかどうか分かりませんが、あちらでお待ち下さい」

後ろを振り替えると午前中待っていたおじいちゃんおばあちゃんがそっくり戻ってきていた。

「あの裏切り者どもめ」

私は床にツバを吐くとソファに腰掛け、テーブルに足を投げ出した。

「あーあ、プラモデルの歴史博物館はお預けだな。ま、昨日も行ったし明日行けばいいか」

少々残念な気持ちを押して殺した。おじいちゃんおばあちゃんも押し殺したくなったがそこはグツと舌を噛んで堪えた。

ロビーに置いてあった女性一番という雑誌に熱中していると、いつしか私の番がやってきた。3番の診療室に入るように促されると、扉を開け一礼して席に着く。

一礼というのは何度しても気持ちの良いものである。

「はい、今日はどうされましたか？」

五十才位の眼鏡をかけた痩せ形の温和そうな先生である。

恐らく女房に逃げられたのであろう、白衣が少し汚れていた。

「せつ、先生私は助かるんでしょうか？教えてください」

「まず落ち着いて症状を聞かせてもらえますか？」

先生は気が動転している私を気遣い、優しい口調で話された。

そのソフトな語り口、落ち着いた振る舞いに自分の心の奥にある女の子の部分が激しく彼を求めた。

「ちょっと頭が痛いのと喉が痛いのがありまして、私の初見では香港B型インフルエンザではないかと思われます」

「ああ、それはこちらで判断しますので」

「はい、胸を見せてください」

「え？いきなり胸ですか？……」

ドキドキしながら胸をはだけて見せると、ふと履いてきたパンツの柄が気になった。

順番的に言っとそついう事だからである。

「はい、脈をとります。はい、結構です。熱はありますか？」

「熱は37・2度でした。顔が火照っているのは熱の所為ではありませんが」

「はあはあ、これは只の風邪ですね。」

お薬三日分出しますんで、受け取ってお帰りください」

「ちよつ、ちよつと待つてください。私の意見も聞いて下さい。私の体の事は私が一番分かるんです。大体只の風邪でこんなに白目剥いてる人がいますか？香港B型インフルエンザなんです」

「ほお、その根拠はなんですか？」

「あつ、はい、私は昨日プラモデルの歴史博物館の帰りに中華街に行っただけです。香港型の。そして、朝起きたらこの有様ですわ。はい」

私はいやらしくならない程度に自らの論理を説いた。

いやらしいのは先生が私の胸を見る目だけでたくさんだった。

「中華街で香港と言うのはなんとなくですが理解できるんですけど

も、インフルエンザはどこから出てきたんですか？」

「あつ、はい。1923年にオランダの医学博士マツケルンがジュネーブで行なわれた国際会議において発表した論文によりますと、ウィルスと言うものは決して簡単なものではないんです。

いわゆるマツケルニズムですね。それは先生にも分かりますよね？」

「うーん、ちょっと分からないけども、B型は？」

「私B型です。RHの、あの、B型です」

「あー、なるほど、分かりました。では、あなたの言うようにお薬出しますんで。今日はとても勉強になりました。お大事にどうぞ」

「あつ、いえ。少しでしゃばりすぎましたかね。またなにかありましたら連絡してください。これ、私のアドレスです」

私はカルテの隅に自分のメールアドレスを書くと、再び帽子とサングラスを取り深々と頭を下げた。

それからロビーに戻ると、お薬を貰う迄の間、先程の雑誌の続きに夢中になった。

楽しい時間ほど早く過ぎるもので、一冊読みおわるよりも前に名前を呼ばれた。

「ではお薬が二十年分出てますので」

「えっ？先生は三日分ておっしゃいましたけど」

「ああ、なんでも要注意の所があつたので長いスパンで見たい
そうです。こちらのピンクのお薬は毎食後三回。白いは気分が悪
くなった時、青いのは街中で大声を張り上げそうになった時に二十
粒一気にお飲み下さい。最後にこの携帯用ブザーをお渡ししますの
で青いのを飲んだらすぐに押してください」

「はっ、はい分かりました。やはり只の風邪ではなかったんですね。
ありがとうございます」

「はい。精々お大事に」

「あなたも心と身体をお大事に。これ、気が向いたら連絡して下さ
い」

受付の記帳欄に自分のメールアドレスを書き、帰宅することにした。
後は帰って、可愛くてプリップリの魚が一匹釣れるのを待つだけだ
ある。

・・・翌日私は街中でブザーを押した状態で倒れていたのを通行人
に見見された。

記憶は一切なかったが、道端に青い

薬が散らばっていたそうだ。

何が起こったのか、誰にやられたのか、何故ズボンの前の部分がじ
んわり濡れているのか見当もつかなかった。

私は病院のベッドの上で色々な事を考えた。

今までのこと、自分のこと、家族のこと、友人のこと。

おかしかったのは私なのか、それとも私の周りの世界なのか。

誰に答えがだせるだろう。

そう、答えなどない。

それこそが答えなのである。

答えなどない。テストの答案にこのような事が書かれていたら田中先生は二点しかくれないであろう。

名前を書けたことに一点、学校を休まなかったことに一点である。

結局私が今までやってきたことはたった二点の評価しか得られないのだ。

今まで何をやってきたのだろう。

古びた日記はそう締め括られていた。

セピア色の思い出はそれでもなお鮮明で色鮮やかに私の胸の奥にあった。

現在私は日帝大病院で総理事長をしている。名実ともに世界NO.1の病院のトップだ。 あの時、あの道端で倒れて以来、死

んだ気になって勉強した。そう、二点の私はあの時死んだのだ。

朝は新聞配達、昼は工場に勤務し、夜は必死に勉学に励んだ。

眠くなったらボールペンを太ももに突き刺し、泡を吹きながら学んだ。

夜な夜な外へ出ては若い女性の後をつけていき、人間の行動心理学を学んだり、新聞を配達しながら新聞をちらちら盗み見し、社会情勢を学んだりもした。

やがて二点だった私は十点になり三十点になった。

今、私は五十才。人生の半分を終え、やっと五十点といったところだろう。

なんとか長い一生を終えるまでに百点になりたいものである。

五十回目の誕生日を迎えた日、春の日差しが暖かい午後だった。

タバコに火を点けると静かに日記を閉じた。
外では鶯達が歌っていた。

あとがき

作者はこの作品のなかで何を伝えたかったのでしょうか？

各方面で賞を総なめにしたこの作品は実は作者が十歳の時に既に書き上げていた物なのである。

第二次世界大戦中の1944年。フランスの劇作家アーノルド・ブツクリンは、戦闘機で上空から戦地にこの作品をばらまき、撃墜されて海に散ったという。

その後、この文献を読んだ兵士達が敵も味方もなく泣きながら抱き合い人間の尊さを知ったという。

その次の日が終戦記念日だということは歴史的史実が知るところだ。

一人の少年が作り上げた文学が世界をつまらない争いから救ったのである。

ありがとう。

ほんまにありがとうな。

（後書き）

読んで頂いてありがとうございました。
ご意見、感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7860b/>

巨大病院

2011年1月27日04時07分発行